

中上級日本語学習者を対象とする ディクテーションの利用について

中込明子

要旨

聞き取りの研究はその調査方法に決定的なものがなく、日本語教育の分野で、実証的な研究はまだあまり多いとはいえない。ディクテーションは聞き取りや、表記の練習等でよく使われるが、ディクテーションそのものに対する評価はさまざまである。ディクテーションは日本語の総合的な能力をテストすることができるのか、また練習としてはどのような使い方が効果的であるのかを、先行研究を基にまとめる。

筆者は中上級日本語学習者の聴解の授業で、おおまかな内容把握の練習と共に細部を正確に聞く練習を行った。後者の練習方法としてディクテーションを利用したが、本稿ではこの授業についても触れ、聞き取りの練習におけるディクテーション使用の具体例を示す。また、学習者に対して行ったアンケートの結果から、彼らがディクテーションの練習にどのような評価をしているかを見た。

[キーワード] 中上級日本語学習者、ディクテーション、ILP、
アンケート結果

1. はじめに

外国語教育ではこれまでディクテーションがさまざまな形で利用されてきた。ディクテーションに対する評価は時代と共に変わってきたが、最近のコミュニケーション重視の傾向の中でディクテーションは積極的には評価されていないようである。ディクテーションは実際のやり方や採点の基準が教師によりまちまちであり、目的が明確に意識されていないことが多い⁽¹⁾。だがテストとしての側面や練習としての側面からディクテーションが有効だとする報告も出ている⁽²⁾。

本稿ではまず、ディクテーションに対する批判や評価等を概観する。次いで中上級レベルの学習者に対して、どのように用いたらディクテー

ションが効果的であるかを、先行研究を参考にまとめる。最後に、練習としてのディクテーションが、実際の授業の中でどのように展開し得るかの具体例を示し、聞き取り指導の一方法としてのディクテーション利用の可能性を探りたい。

2. ディクテーションに対する批判と評価

1960年代は、構造中心に個別的要点テスト⁽³⁾の視点が強調されていた時代である。Ladoはテスト技術としてのディクテーションに、次のように批判的評価を与えている。

「ディクテーションは言語をほとんど測定していないように思われる。語彙も語順も検査者によって与えられる上、学習者が、音声を正しく聞き取っていなくても、多くの場合、文脈の助けを借りて語彙を認識することができるのである。書き取りに必要な語は、ゆっくり読まれるので音声を間違えて聞くようなことはあまりない。」(Lado 1971:36)

また、Harris (1969) も同様に否定的な意見を述べている。

さらに、コミュニケーション能力の向上を重視する立場からは、次のような指摘ができると田丸(1990:16)は述べている。

「1. 書き取りは、現実に起こるコミュニケーションのあり方を反映していない。 2. 書き取りでは、ある文が正しく書き取れたとしても、それが自分が求めている情報かどうか、それが全体の中で重要な点なのかどうかを判断する訓練にはならない。」

一方、1970年代にテストの専門家の関心が全般的言語能力の測定をめざす総合的テストへと移っていくにつれて、ディクテーションの総合性が見直されるようになってきた。

Valette(1977) は、ディクテーションは全体の内容をつかみ、かつ各語を理解すると同時に単語間の関係を把握しなければならないので、聴解力を測定するのに適しているとしている。

さらに、Oller(1971) はディクテーションの言語処理メカニズムは受身的活動ではなく、「聞き手は話し手からの入力情報に同調して自らも文を生成し、文意を理解し、文構造を分析する積極的な過程である。」としている。また、ディクテーションが学習者の「予測文法」⁽⁴⁾を活性化すると述べている(Oller1975)。

Oller の一連の研究により、総合的能力のテストとしてのディクテーションの可能性が広がったと言えよう。

また、国内での英語教育におけるディクテーションの研究としては竹蓋 (1984, 1988, 1989) と SUENOBU et al. (1979, 1981, 1982) の研究が注目されるだろう。

竹蓋 (1984) は、日本人英語学習者に対して行ったディクテーションによる研究の中で、ディクテーションは適切に問題を作り考えて採点をすれば、非常に多くのことがわかる良い試験のひとつだとして、これを積極的に評価している。

日本語教育では、田丸によるディクテーションの実証的な研究がある。田丸 (1984) は、初級終了から中級後半にかけての、3つの異なるレベルの非漢字系学習者を対象とし、Ollerの方法にしたがって日本語のディクテーションを行った。その結果、ディクテーションが何を測っているのかについての手掛かりは得られなかったが、被験者をそのレベルに応じて3つのグループに弁別する力は認められ、ディクテーションが総合力の判定に利用できる可能性はあるとしている。

さらに、田丸 (1990) は、中級レベルの学習者にディクテーションをさせた予備テストの結果から、ディクテーションが日本語の総合能力をテストするものとして利用し得ると結論づけている。そしてまた「音が聞き分けられさえすれば書き取りはできるのだから意味がない」とする伝統的な書き取り批判は、Ollerの方法による「書き取り」にはあてはまらないと述べている。さらに、ディクテーションは聞き取りのスキルの習得を目標とするものではなく、中級段階での基礎のスキルを固める類いのものだとして、intensive listening (IL)⁽⁵⁾ の練習、およびノート・テイキングの前段階としての利用の可能性を挙げている。

Kaga(1991)でも、ディクテーションと Educational Testing Service の日本語能力テスト⁽⁶⁾ 及び面接テストとの相関から、ディクテーションは日本語能力を測定するのに効果的な方法であるとしている。

従来のディクテーションとはやや異なるが、小林・フォード (1992) は文法項目の音声聴取に関する実験を行い、「知らない文法項目は聞き取れない」ことを示した。この実験では、文法項目部分のひらがな1字

分を抜いた穴埋め形式の問題を、テープを聞かせて埋めさせるという方法をとっている。これにより、文の一部分の音声聴取がその文全体を正しくとらえる能力なしには難しく、音声の聴取と文全体の聴解が双方向で作用しあっていることが示されている。この結果からも、音が聞き分けられさえすれば書き取りはできるという批判はあたらないことがわかる。

このほかに調査の方法としてディクテーションを使用した聞き取りの誤答分析の研究がいくつかある。(神田1990、フォード1991、吉岡1993、早川1993)

新屋(1993)もその一つであり、ディクテーションのメカニズムに関わる「ある部分の誤答率はその前後の誤答率と相関関係にある」との仮説を実証した。すなわち、音声と意味との対応作業がある部分で不首尾に終わった場合、次の対応作業へのとりかかりが遅れたり、意味が混乱してしまうなど、後続部分に影響を及ぼすことが容易に起こり得るし、この作用はまた、逆方向にも働くとして述べている。

以上ディクテーションについて概観してきたが「普通の早さ、自然な読み方、読まれる文は聞き手の短期記憶に挑戦する長さ」という Oller の挙げる実施面での条件を満たせば、ディクテーションは日本語の総合能力をテストすることが可能だと言えるのではないだろうか。また、田丸が指摘するように中級レベル以上でも、ディクテーションは練習の一方法として利用価値の高いものであると思われる。

3. ディクテーションの効果的な利用

中級レベルにおける田丸(1990)の予備テストの結果から、ディクテーションは 1. 細部まで聞きとろうとする集中力 2. 処理能力 3. 書く早さ の三つが、時間の圧力のもとで活発に作用しあっていることがうかがえるという。2. の処理能力とは「①聞いて意味を理解しそれを文に復元する。②前に聞いたことを文にしながらか新しい文を聞いて理解する。③語彙力、文法力を働かせる。」ことであり、この処理能力を意識的に働かせるよう体系的に練習することで、ディクテーションの効果が期待されるとしている。具体的には先に述べた I L の練習として、およびノート・テイキングの前段階としての二つの可能性が挙げられて

いる。

筆者はこれまでも何回か、予測・類推を促すトップダウンの方向での指導と共に、ボトムアップの方向でディクテーションを利用した細部の正確な聞き取り指導を行ってきたが、今回担当した聴解でも、この二つを組み合わせる授業を行った。

3.1 聞き取り指導の二つの方向

聞き取りにおいて、トップダウンとボトムアップの二つの方向の指導が必要だということは、これまでも主張されてきた。竹蓋(1988)は「音声聞き取り、内容聞き取り」、土岐(1988)は「こまか聞き取り、おおまか聞き取り」という言葉を使っている。音声レベルの問題には触れていないが、當作(1988)の“intensive listening practice (ILP), extensive listening practice (ELP)”もまた、この二つの方向を意識したものと考えられる。ILPとは長さが比較的短いものを聞いて、その内容の詳細までをも分析・理解しようとするものであり、ELPとは長い内容のものを聞いて、その中心的内容・概要を理解しようとする聞き方である。この両者の効果的な連携が重要なことは認識されている。しかし中級以上の授業では、聞き取りの、しかも細かい指導にかかる時間的余裕が十分ではなく、大まかな内容理解の確認で終わってしまうことが多い。そこで、ある程度意識的にILPの練習を授業に取り入れていく工夫が必要であると思われる。

4. 聴解授業におけるディクテーション

ここでは、筆者が1993年後期に行った聴解指導の一例を紹介したい。授業はILPとELPを組み合わせるそれぞれ異なる教材を使用した。以下ではディクテーションを利用したILPを主に見ていく。

4.1 学習者

対象となったのは大学の中上級研究留学生である。後期の最初にプレイスメントテストを行い、受講希望者を初級から上級まで5つのクラスに分けているが、ここで取り上げるのは、中級(Cクラス)、上級(Dクラス)の合同の聴解の授業である。この聴解の受講者は男性7名、女

性13名で、年齢は19歳から36歳（20歳代が中心）である。国籍はアジア、アフリカ、ヨーロッパなど14か国に及ぶ⁽⁷⁾。日本語・日本文化研修留学生や教員研修留学生を含む研究留学生で、専門は日本語及び日本文化等である。

4.2 授業の目的

筆者が担当した聴解の授業では、1コマ（90分）を二つの部分に分けた。前半45分はディクテーション用のテープを使用し、細部を正確に聞き取る練習を行った。後半はビデオを使用して予測・類推を積極的に促し、おおまかな内容をつかんでいく練習に当てた。また、ビデオの内容についてのディスカッションも取り入れた。

4.3 教材

C、Dクラスの研究生は、大学の講義を聞いて理解する力をつけることが必要とされる。そこでディクテーションの練習にあたって、講義・講演タイプ的一方通行の独話を、教材として使用した。中上級レベルといっても、学習者は必ずしも聞き取り能力の高い者ばかりではない。そのため実際の講義や講演ではなく、ある程度学習段階への配慮がされている日本語の教材の中から素材を選んだ。

最初と最後に行ったのは『日本事情シリーズ 日本の放送』⁽⁸⁾（日本語教育学会）の一部分を、ディクテーション用に手を加えたものである。また、その間に三回ディクテーションの練習を行ったが、それぞれのトピックは①「チカイエカ」、②「体のリズム」⁽⁹⁾、③「ゴミ問題」⁽¹⁰⁾である。これらのテキストは、学習者にとって初見のものであるように、また専門によって有利不利の差が出ないように配慮し、一般的な話題を選んだ。

一方ELPのために用いたビデオは「NHK現代ジャーナル日本語 あいまい表現は日本人の美意識か」である。これは45分の番組だが、毎回10分前後でまとまりの良いところで区切って使用した。

4.4 授業の実際

1) 授業のスケジュール

ここで紹介する授業は、1993年10月から1月までのものである。今回は、聞き取り能力の変化を追跡する調査も併せて行っていたため、初回と最終回は同じもの（「日本の放送」）を書き取らせている。そしてこれら二回のテストの間に、ディクテーションによる聞き取りの練習（①～③）を行った。なお、最初に学習者の日本語の能力を確認するためにクローズ・テストを実施し、また最後に日本語学習歴やディクテーションについての意見・感想を調べるためのアンケートを行った。さらに、調査終了後であるが、学生の中の一部（9人）にフォローアップインタビューを行った。

2) ディクテーションの実施方法

実施にあたって、書き取らせるテキストと共に、やり方や注意事項、ポーズ、内容についての質問、答えの選択肢等も含め、すべて録音したテープを作成した。このディクテーション用テープは約15分で、自然な調子、自然な速さで録音してある。テキストは3回聞かせるようになっている。1回目は、始めから終わりまで通して聞かせ、2回目はポーズのところで書き取らせる。3回目には、再び通して聞かせながら、書き取った文をチェックさせるという手順である。なお、ポーズはテープの中に十分な時間を取って録音してある。（20～30秒）

表記は漢字仮名交じりで書くこととし、漢字を使ったときは、必ずその読み方も書くように指示した。

一度に読まれる文の長さについては Oller (1979) の「学習者の短期記憶に挑戦するのに十分な長さ」を意識した。この長さは、書き取る文の難易度や学習者がディクテーションに慣れているかどうかにもよる。今回の学生はディクテーションは初めてという者がほとんどだった。予備調査から、ポーズは4文節前後が適当だということがわかったので、できるだけ4文節前後で、意味の区切りのよい所にポーズを入れることにした。ディクテーション回収後には、事後手当としてトランスクリプションを渡して、語句や内容についての解説を15分ほど行った。このようなディクテーションのやり方は、竹蓋(1989)の英語教育におけるディクテーション指導の方法を参考にした。なお、ディクテーションの①～③では、1回目と2回目の本文の間に大まかな内容理解を見るための質問をそれぞれ三題ずつテープに録音し、それに続く四つの選択肢も耳か

ら聞いて答えを選ばせるようにしてある。

3) フィードバック

ディクテーション終了後、すぐに学生から用紙を回収し、正解を渡した。学生に自分が間違ったと思われる部分に下線を引かせてからもう一度聞かせ、聞き取れなかった理由を意識させるようにした。そしてトランスクリプションの語句や内容、質問の正解等についての解説を行った。同じテキストを4回聞かせたわけだが、それぞれの回毎に聞かせる目的をはっきり示し、ぼんやり聞き流さないように注意した。回収したディクテーションの用紙は、もとのテキストどおりでない部分はすべて訂正して返却した。誤答の詳しい分析はここでは行わない⁽¹⁾。

4.5 アンケートの結果

これまでに授業でディクテーションをしたことがあると答えたのは20名のうち3名だけだった。そこで当初はディクテーションのやり方やねらいなどについて説明し、また事後手当で聞き方のヒントなどについても示しながら授業を進めた。そしてディクテーション終了後の1月に、アンケート調査を行った。以下に、ディクテーションに関する質問部分の調査結果をまとめる。なお回答は、欠席者5名、途中帰国者3名を除く12名から得た。

「ディクテーションの練習は役に立ったと思いますか。」との問いには、役に立たない 0、普通 1人、少し役に立つ 2人、役に立つ 4人、大変役に立つ 5人で、「役に立つ」と「大変役に立つ」が75%を占める。

また、上記の質問で「役に立たない」以外を選んだ者について「どんな点でディクテーションが役に立ったと思いますか。」という質問に対しては、複数回答可能としたが、

- ・意味、内容を考えながら聞くようになった 9人
- ・細かいところまで正確に聞けるようになった 7人
- ・日本語を聞くのに慣れてきた 6人
- ・新しい語句や表現を知ることができた 6人
- ・まだ聞いていない部分についても、先をだいたい予測して聞くようになった 5人
- ・その他 0

という結果が得られた。学生の側でも、アンケートに答えた者の半数以上が細部を正確に聞く練習という点でディクテーションを評価している。また注目されるのは、細部と同時に「意味内容を考えながら聞く」という点を75%の学生が評価していることである。今回のようなまとまった意味内容を持つテキストのディクテーションというのは、文の一部分の書き取りが、その文全体を正しくとらえる能力なしには難しく、意味内容を考えながら聞く姿勢を必要とすることを示していると言えるのではないだろうか。授業についての感想や意見の欄には、以下のような記述が見られた。

「とても役に立ちます。しょきゅうの日本語を教えましたから、短い文章だけ使いました。今度ほんとうに日本語を使うチャンスがあります。とくに、じゅぎょうの中にいろいろなあたらしい知識が分かるようになりました。」（教員研修留学生）

「ディクテーションをすると、具体的に自分の能力を見積もることができし、しかも、集中して聞くようになる。最後には、ディクテーションをやると、必ず積極的な姿勢を取らないといけないということで、積極的な勉強し方になると思う。」

「ディクテーションの練習はたいへん勉強になっています。10月に授業にはじめて出席したころからこれはいいなと思いました。今までのディクテーションはずいぶんやさしかったがこれから難しくなるのではないかときたいしています。」

「今までの段階はちょうどいいと思いますが、時々会話的な文をディクテーションにしたら、いかがでしょうか。」

「続いて練習してもらいたいと思います。内容はもっとおもしろいものや実際に使える表現や単語や知識があるといいと思います。それに、うたのディクテーションもおもしろいと思います。例えば、一回に一曲のうたを聞かせて、聞き取りの練習をさせたら、おもしろいし、いい練習になります。」（日本語・日本文化研修留学生）

「ディクテーションはもっとしてほしい。本当に役に立つと思う。」

「今までのやり方を続けてほしい。」（教員研修留学生）

5. 終わりに

授業中の学生の反応およびアンケートの結果から、ディクテーションを利用したILPの授業に対しては、おおむね肯定的な評価が得られたと思う。しかしこれは、ビデオを使ったELPの指導と組み合わせて行っているという前提があつたのである。ここでビデオを使ったELPの授業について触れるだけの紙面の余裕はないが、聞き取りの指導にはこうした二つの方向の指導の連携が重要であることを再確認したい。

今回はテキストを全部書き取らせたが、時間の節約および学生の集中力の負担軽減を考えると、書き取る箇所を減らして部分ディクテーションにするなど、さらに工夫する余地があつた。またディクテーションの事後手当は教師主導型で行つたが、ペアやグループで検討して最終稿をつくらせるなど、ディスカッションに結び付ける工夫も可能だろう⁽¹²⁾。英語教育では、さまざまなアイデアを盛り込んだディクテーションの練習用の本が出ているが(Davis & Rinvoluceri, 1988)、日本語教育においても、さらに多様な練習の形を工夫して、従来の方法に変化を持たせ効果的な授業を行いたいと思う。

<注>

- (1) 田丸(1990) p.15の指摘による。
- (2) テストとしての側面についてはOller(1975,1979)が、練習としての側面については田丸(1990)が、その有効性を報告している。
- (3) 外国語を言語の特定の要素に分け個別に測定するテストのこと。
- (4) 全般的な英語能力のとらえ方についてOller(1973)は、英語の各技能ごとにその内容が異なるように思われているが、各技能の間は何か共通の因子によって結びつけられているのではないかとし、それを「予測文法」(grammar of expectancy)と呼んでいる。
- (5) p.5のILPに詳述。
- (6) 英語話者のための日本語テストで、1年間の日本語学習から大学や大学院レベルの一般的レベルの日本語コース終了程度の学習者までを対象としている。
- (7) 学生の国籍および人数は、タイ3、モンゴル2、インドネシア2、イタリア2、ベトナム2、シンガポール1、インド1、エジプト1、フランス1、イスラエル1、ロシア1、フィンランド1、ポ

ーランド1、ネパール1、の合計20名である。

- (8) 『日本事情シリーズ 日本の放送』は、日本語学習経験 500時間程度の者が対象となっているが、放送用語や外来語が多いため、対象とする学習者の能力は、もう少し上になると思われる。
- (9) それぞれ『毎日の聞き取り50日 上』15課、10課を参考にした。
- (10) 『日本語の聴解』30課をもとにリライトして教材化した。
- (11) ここで紹介したG大学については、中込(1995)でそのデータの誤答分析を行っている。
- (12) 田丸(1990) p. 15を参照。

[主な参考文献]

- 石田敏子 (1992) 『入門日本語テスト法』大修館書店
- 板倉武子他(1985) 「Dictation—その理論的背景・評価としての妥当性・誤答の類型—」 『Language Laboratory』 No. 22 pp. 5-21
- 神田紀子他(1990) 「ディクテーションを用いた聞き取り指導」 『日本語教育論集』第1号 名古屋大学日本語学科 pp. 26-56
- 新屋映子 (1993) 「日本語中上級学習者の聴解能力について」 『日本語教育』79号 pp. 126-136
- 竹蓋幸生 (1984) 『ヒアリングの行動科学』研究社出版
- (1989) 『ヒアリングの指導システム』研究社出版
- 竹蓋幸生他(1988) 「ヒアリングの理論と指導に関する基礎的研究」 『Language Laboratory』25号 pp. 3-13
- (1988) 「ヒアリングの理論と指導に関する基礎的研究Ⅱ」 『名古屋学院大学外国語教育紀要』18号 pp. 35-42
- (1989) 「ヒアリングの理論と指導に関する基礎的研究Ⅲ」 『千葉大学教育学部研究紀要』37巻 pp. 247-258
- 田丸淑子 (1984) 「総合力判断の手がかりとしての書き取り」 『日本語教育』52号 発表要旨
- (1990) 「中上級日本語学習者に対する書き取りの練習—予備的考察—」 “Working Papers” Vol.1 (1) pp. 15-24
International University of Japan
- 土岐 哲 (1988) 「聞き取り基本練習の範囲」 『日本語教育』64号

- 中込明子 (1995) 「ディクテーションの誤答分析から見た聞き取りの研究—中上級日本語学習者を対象として—」 『IUJ Conference Proceedings 1995』 国際大学 印刷中
- 當作靖彦 (1988) 「聴解能力開発の方法と教材—聴解のプロセスを考慮した練習—」 『日本語教育』 64号 pp. 59-73
- 早川幸子 (1993) 「聴解における音の知覚と語彙力—金沢大学留学生についての調査から—」 金沢大学留学生教育センター紀要 第2号 pp. 25-35
- フォード順子(1991) 「聴解ディクテーションの『誤聴』分析—中・上級の文法の困難点を探る—」 『日本語教育論集』 第7号 pp. 45-64 筑波大学留学生センター
- 吉岡英幸 (1993) 「聞き取り能力：留学生と日本人の調査分析」 『講座日本語教育』 第28分冊 pp. 47-59 早稲田大学日本語研究教育センター
- Davis, P. & Rinvolucris, M. 1988. Dictation: New methods, new possibilities. Cambridge, Cambridge University Press.
- Takehi, Hisao et al. 1981. "An Analysis of Perceptual Error : Learning Process" 『大学英語教育学会紀要第12号』 : 133-144
- Kaga, M. 1991. "Dictation as a measure of Japanese proficiency", Language Testing 8, 2 112-124
- Lado, R. 1961. Language Testing, McGraw-Hill, New York
(ラド、R 1971 『言語テスト』 大修館書店)
- Suenobu, Mineo et al. 1982. "An Analysis of Perceptual Error : Effect of Learning and Mechanism of Hearing" 『大学英語教育学会紀要第13号』 : 83-97
- Oller, John W. Jr. 1971. "Dictation as a Device for Testing Foreign Language Proficiency", English Language Teaching 25(3):254-259
—1975. "Dictation: A test of grammar-based expectancies." English Language Teaching Journal 30(1):25-36.
—1979. Language Tests at School: A Pragmatic Approach. Longman

(中央学院大学)